

〔史料紹介〕 法隆寺壁画模写の巨匠 入江波光の修業時代

東 野 治 之

大正から昭和にかけて活躍した入江波光は、その孤高の作風が現在も高く評価されている日本画家である。長らく京都市立絵画工芸専門学校（現在の京都市立芸術大学）の教授を勤め、古画の模写に熟意と高い技術を有したことも知られる。とりわけ有名なのは、晩年その全精力を傾けながら、遂にその完成を見届けることなく逝った法隆寺金堂壁画六号大壁の模写であろう。私は一九六五年に国立近代美術館京都分館（現京都国立近代美術館の前身）で開催された「入江波光」展に、その模写が展示されているのを知り、これを見るために訪れた会場で大きな感銘を受けるとともに、波光という画家に関心を抱くようになった。

波光の画業は、今日『入江波光画集』（講談社、一九七八年）その他で主要作品を見ることができ、また遺著となった『画論』（北大路書房、一九四九年）から、そのやや狷介な人柄や主張をうかがうこともできるが、波光の若き日については、京都市上京区御前通丸太町上ルに生まれて、京都市立美術工芸学校、さらに京都市立絵画専門学校に学び、大正二年（一九一三）研究科修了とともに母校の嘱託になったという以外、語られることが少ない。従って専門学校本科及び研究科前後の修業に関しては、ほとんど具体的に知られるところがないといってよいであろう。しかし専門学校研究科修了の年に発表された「振袖火事」など二、三の作品には、初期の肉筆浮世絵的な画風が表れており、波光が

それ以前、この方面の絵に学んでいたことは確実と見られる。

実際、画風からの推定にとどまらず、その事実があったことを裏付ける史料が存在する。それは京都市中京区高倉通夷川上ル在住の大槻さ、舟という人物が、大正五年（一九一六）に私家版（百部限定）として刊行した『風流祇園桜』である。さ、舟についての詳細は把握できていないが、大正十年、その遺著として同じく私家版（二百部限定）で刊行された『艶色京紅』の記事とも併せ考えると、京都の清文堂印刷所で版画に関わる職を持ち、自ら好色本や絵本、一枚刷の版画なども熱心に集めるコレクターであったらしい。『風流祇園桜』の次のような跋は、その独特の人柄をよく表している。

伊勢や源氏の物語を今様に作り、小倉百首を俗謡にうたへば、今の法規は許すまい。只何事もうはべさへ飾れば太平無事なり。我れ斯様の絵本を刊行せば、馬鹿な色気違の沙汰とも思はれん。されど生れて未だ女郎屋の二階も知らねば、芸者買いの味も知らず、たまに用向ありて色町を通り、呼びとめられて逃げ出したり、袂引かれて怒鳴るほどの野暮天なり。四十面さげて妻もなければ、今にヤモメの一人暮し、能くく女に縁のない人間なり。されど生きた女に縁こそなけれ、昔しの女に縁ありてか、己が部屋に集まりたるは遠き寛文の頃より明治の初めに至るまで、都女は云はずも

あれ、江戸紫の恋衣、浪速の芦のかぎりなき、数多の美女に繞圍せられ、六宮三千の美女そののけにて、唐の玄宗の色男もはだして逃る位、亦盛んなりと云ふべしだ。

其中より艶なるものを選び出し、今の法規に触れぬ様、醜き所は衣をきせ、数多く写す面倒さに、版に彫らせて已が刷り、同じ仲間の人たちに、たゞで進んぜまいらせん、にがい顔したおつさんも、万ざらいやでもおへんやろ。これを自跋とす。

大正丙辰の初春
(五年)

花街に不通の道楽もの



右の跋にもあるとおり、本書は木版印刷による復刻に特色があり、奥付に拠るとその製

作は、明治四十四年十二月初刻、大正三年十月刻了、同四年六月印刷、同五年一月製本と進んだらしい。そこで注目されるのは、この書の凡例にみえる左のような謝辞である。

本集の版行に就きましては、京都の考古家小山暁杜氏、山口松香及佐々木華月氏、入江波光氏、宮

島春齋氏、井上和雄氏等の秘本を借覧するを得たるを感謝致します。

さらに奥付には「表紙画 入江波光」ともある。これらの「入江波光」こそ、本稿の主題とする画家その人であろう。もとより同名異人という可能性も完全には排除できないが、「波光」という号は決してありふれたものではない。この書が準備、刊行された時期は、波光二十四歳から二十九歳に当たり、すでに京都市立絵画専門学校本科から研究科を経て同校嘱託となった時期で、現存作品に拠ると、すでに「波光」を名乗っていた。大槻さ、舟と波光の交友がどのようなものであったのかはわからないが、同様な嗜好を共有する親しい関係があったと推察できよう。初期の画風の拠つて来るところが、この種の趣味にあつたことはほぼ間違いない。その意味で本書の表紙画(挿図参照)は作品として貴重である。因みに本題と直接関係はないが、並んで挙げられた「井上和雄」は、浮世絵や書誌の研究で後年名を成したその人に相違なからう。

大槻さ、舟は、「風流紙園桜」の刊行後、さらに同種の書物の私家版を企画し、作業を進めていた。しかし完成を見ることなく、大正九年に逝去する。さ、舟の妹、清水薫葉が、これを継承して刊行したのが先にふれた『艶色京紅』であった。さ、舟が撰しておいたこの書の序(原題は「本書の刊行に就て」)には、刊行の経緯とともに次のような一項があるが、文中の「入江氏」もまた勿論波光であろうし、作業を援助したことが推定できる。「入江氏」のみならず、一連の協力者について名前が省かれているのは、書物の性質上、迷惑が及ぶことを憚った結果であろう。

本書発行に就ては其材料を給せられた、京都の吉川、秋田、小山、大阪の永田、木村、橋本諸氏の厚意と入江氏の努力の尤も深きを感謝いたします。

私が波光と初期浮世絵の関係に注目する契機となったのは、二十年以上も前、ある古書籍即売会で手にした『艶色京紅』にある。当時は、艶本の挿画に似つかわしくない晴朗で和やかな気分招惹されただけであったが、数年前、偶然その前身となる『風流祇園桜』に遭遇し、はからずも「入江波光」の名を見出すことになった。両書とも部数限定の私家版であり、若き日の波光を語る史料として、ここに紹介しておくことも無意味ではないと思われる。入江波光に関心を持つ人のお役に立てば幸いである。

